

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：51401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07398

研究課題名(和文) 英語の現在分詞の通時的・共時的研究

研究課題名(英文) A Diachronic and Synchronic Study of Present Participles in English

研究代表者

杉浦 克哉 (Katsuya, Sugiura)

秋田工業高等専門学校・創造システム工学科人文科学系・講師

研究者番号：40781498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：現在分詞による名詞後位修飾構造の研究では、完全関係節の主要部名詞繰り上げ分析を縮約関係節に適用した。中英語の縮約関係節の主要部名詞と限定詞の構造を調査し、数量詞allが限定詞theに先行する構造に基づき、縮約関係節の先行詞は14世紀に限定詞システムを確立しD構造を持ったと主張した。これにより縮約関係節が主要部名詞繰り上げ分析と矛盾することなく説明されることを示した。

現在分詞による名詞前位修飾構造の研究では、接辞-ingの機能に焦点を当てつつ形容詞として振る舞う現在分詞が形成される仕組みを提案した。また経験者目的語をとる動詞の現在分詞による名詞前位修飾構造の史的発達を調査した。

研究成果の概要(英文)：In the study of noun phrases postmodified by present participles, I adopted a head raising analysis of relative clauses. Based on the historical fact that reduced relative clauses appeared in Middle English(ME), I investigated the structure of the head noun and the determiner of the noun phrases postmodified by present participles in ME. I argued that the antecedent noun phrase of reduced relative clauses had the D structure in the fourteenth century, based on a construction in which a quantifier 'all' precedes the determiner 'the.' I showed that reduced relative clauses are explained properly under the head raising analysis.

In the study of noun phrases premodified by present participles, focusing on the function of the suffix '-ing,' I suggested the mechanism of the formation of present participles that behave as adjectives. In addition, I examined the historical development of noun phrases premodified by present participles that select experiencers as their object.

研究分野：英語学

キーワード：現在分詞 縮約関係節 主要部名詞繰り上げ分析 名詞前位修飾構造 with構文

### 1. 研究開始当初の背景

生成文法では伝統的に削除、移動、束縛等が関わる現象の研究は盛んに行われてきたが、現在分詞の統語現象を扱った研究は独立分詞構文と縮約関係節の分析を除くと少ない。さらに現在分詞の史的統語変化を生成文法で分析した研究も筆者がこれまでにを行ったものを除くとほとんどない。縮約関係節の先行研究は Thompson (2001)をはじめとしていくつかあるものの、分析に不十分な点が見られたり、特定の一部分にのみ焦点を当てた分析だったりするため問題が残る。このため決定的といえる分析は存在せず、一致した見解はいまだ得られていない。

このような背景のもと本研究では現在分詞による名詞後位・前位修飾構造、with 構文を扱い、各構文を生成文法理論または文法化の枠組みで説明することを試みた。各構文へ決定的な分析がいまだ与えられていないことを鑑み、先行研究でほとんど言及されてない通時的な面からのアプローチをすることで新たな分析の手掛かりを得ることができると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点である。1つ目は、英語の現在分詞による名詞後位・前位修飾構造、with 構文の史的発達を調査し、それらが英語史においていつ現れどのような発達の経路を経て現代英語に至っているのかを明らかにすることである。2つ目は、当該の構文を生成文法理論で通時的・共時的に説明することである。そして生成文法理論に経験的事実による裏付けを与えることで、より普遍的な文法理論を構築することを目指す。

### 3. 研究の方法

初期の英語の用例を収集するために、*Oxford English Dictionary (OED)*の引用例文検索機能と4つの歴史電子コーパス *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)*(古英語)、*The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2)*(中英語)、*The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*(初期近代英語)、*The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)*(後期近代英語)を使う。

現在分詞による名詞後位修飾構造、いわゆる縮約関係節の研究では完全関係節の主要部名詞繰り上げ分析を採用する。この分析では主要部名詞は関係節内部から繰り上がると仮定される。そして現在分詞に後位修飾される名詞句はDPで機能範疇Dが補部にAspPをとる構造を仮定する。したがって本分析では後位修飾される名詞句がD構造を有することが必須である。この路線で分析を進めるならば、中英語に縮約関係節が現れた時(Sugiura (2015))、先行詞名詞はD構造を有していなければならない。この予測を確かめる

ため、筆者が博士論文でPPCME2コーパスを使って収集した中英語の縮約関係節の用例を再調査し、先行詞名詞の限定詞の構造を精査する。

現在分詞による名詞前位修飾構造の研究ではMeltzer (2010)の分析を出発点とし、どのような動詞の現在分詞が形容詞として振舞うのかを精査し、形容詞として振舞う現在分詞が作られる仕組みを生成文法理論で説明する。またsurprisingのような経験者を目的語にとる心理動詞の現在分詞を生成文法で分析する研究は非常に少ないためこれも扱う。

### 4. 研究成果

縮約関係節の研究では完全関係節の主要部名詞繰り上げ分析を採用した。具体的には、縮約関係節は限定詞Dが補部にAspPをとる構造で、主要部名詞は関係節内部からAspP指定部へ移動する。この構造を仮定すると縮約関係節はD構造が必須となる。したがって縮約関係節が中英語に現れた時、それはD構造を有する必要がある。この予測を確かめるため中英語の縮約関係節の先行詞名詞の限定詞を調査した。そして数量詞allが限定詞beに先行する構造が14世紀に存在したことを指摘し、数量詞allはDP指定部、またはDP付加位置を占めると仮定するIbaraki (2009)に基づき、当該の構造は現在分詞に後位修飾される名詞句がD構造を有する証拠であると主張した。

また縮約関係節の先行研究であるThompson (2001)では縮約関係節がAspPと主張されるものの、Aspがどのような役割を果たすかが論じられていない。さらに縮約関係節がどのような派生により生成されるかに関する理論的な説明も与えられていない。これの不備を補う代案を提案しThe English Linguistic Society of Japan 11th International Spring Forum (日本英語学会国際春季フォーラム2018第11回大会)の口頭発表として採択された。

本研究では現在分詞縮約関係節を主に扱ったがこれに関連する研究として過去分詞縮約関係節の研究も進めた。現代英語の過去分詞縮約関係節は母型節から独立した時制解釈を許すためTPと考えられる。したがって母型節から独立した時制解釈を許さないゆえTPが無い現在分詞縮約関係節とは構造の大きさが異なると考えている。また、過去分詞縮約関係節は古英語から存在したことはしばしば指摘され、YCOEコーパスを用いた調査でもそれは確認された。そして古英語からそれはTPであったことを示唆する用例を得ることができた。これらの事実から過去分詞縮約関係節と現在分詞縮約関係節は歴史的発達の経路も構造の大きさも異なるゆえ、両社には異なる分析が与えられるべきではないかと考えている。

現在分詞による名詞前位修飾構造の研究

では形容詞として振舞う英語の現在分詞を分析した。Meltzer (2010)のヘブライ語の分析を応用し、形容詞として振舞う英語の現在分詞に対し生成文法理論に基づいた説明を与えた。Meltzer (cf. 2010: 2229) はヘブライ語の事実から「ヘブライ語の過去分詞形態素は、動詞を意味分解した下位構成要素である『活動』や『変化』を動詞から削除するはたらきをもつ。またそれは非有界動詞には付加できない。」という仮定を立てている。本研究ではこれを英語の現在分詞に応用し、現在分詞接辞-ing がヘブライ語の過去分詞形態素と同様の機能を持ち、-ing は動詞を意味分解した下位構成要素を削除すると仮定した。

Play, jump, run 等の活動動詞の現在分詞 playing, jumping, running は形容詞としての特性を示さないが、frighten, surprise 等の目的語経験者動詞の現在分詞 frightening, surprising, そして love, shine 等の状態動詞の現在分詞 loving, shining, さらに understand や reveal 等の到達動詞または達成動詞の現在分詞 understanding, revealing は形容詞としての特性を示す。本研究の分析ではこの違いは現在分詞接辞-ing は動詞の下位構成要素 $[v_{DO}$ 、 $v_{CAUSE}$ 、 $v_{BECOME}]$ または $[v_{BECOME}]$ を削除することはできるが、 $[v_{DO}]$ のみを削除することができない制約を持つためであると論じた。

本研究では状態動詞、活動動詞、到達動詞、達成動詞はその下位構成要素として(1)の構造をそれぞれ持つと仮定している。

- (1) a. 状態動詞:  
 $[vp V_{PREDICATE}]$   
 b. 活動動詞:  
 $[vp v_{DO} [vp V_{PREDICATE}]]$   
 c. 到達動詞:  
 $[vp v_{BECOME} [vp V_{PREDICATE}]]$   
 d. 達成動詞:  
 $[vp v_{DO} [vp v_{CAUSE} [vp v_{BECOME} [vp V_{PREDICATE}]]]]$

(cf. 水野(2000: 110))

$[vp V_{PREDICATE}]$ は全ての動詞が持つ意味の原始要素で状態を表す。活動動詞は $[vp V_{PREDICATE}]$ のほかに $[v_{DO}]$ を、到達動詞は $[v_{BECOME}]$ を、達成動詞は $[v_{DO}$ 、 $v_{CAUSE}$ 、 $v_{BECOME}]$ をそれぞれ持つと仮定する。そして $[vp V_{PREDICATE}]$ に-ing が付加すると、形容詞として振舞う現在分詞が生成されると仮定する。

-ing が到達動詞、達成動詞に付加する際、 $[v_{BECOME}]$ 、 $[v_{DO}$ 、 $v_{CAUSE}$ 、 $v_{BECOME}]$ をそれぞれ削除し、状態を表す原始要素 $[vp V_{PREDICATE}]$ に-ing が付加して形容詞として振舞う現在分詞が作られる。-ing が状態動詞に付加する場合、それは何も削除することなく $[vp V_{PREDICATE}]$ に

付加し形容詞として振舞う現在分詞が作られる。一方で-ing は $[v_{DO}]$ のみを削除することができないため、それが活動動詞に付加する場合は $[vp v_{DO} [vp V_{PREDICATE}]]$ に付加することになる。このため活動動詞の現在分詞は形容詞としての特性を示すことができない。

また心理動詞の現在分詞による名詞前位修飾構造の歴史的発達を YCOE, PPCME2, PPCEME, PPCMBE の各コーパスで調査し、それは古英語には存在せず中英語に現れたことを示した。特に目的語経験者動詞の現在分詞による名詞前位修飾構造は中英語に現れた後、後期近代英語まで増加し続けていることを明らかにした。

With 構文については with が補部に名詞句+現在分詞を選択するタイプの with 構文の歴史的発達を調査した。OED の引用例文検索機能を用いて当該の構文の資料を収集し歴史的発達の経路を示した。主節に対する時や理由を表す with 句は 14 世紀末に現れ、条件や結果を表す with 句は 18 世紀初期に現れた。With 句が主節に対して表す意味が多様化したのは、with 句が 14 世紀末に主節の前の位置で使用されるようになったことに起因する。これは当該の with 句と構造が類似する with + -ing 句との類推による。さらに 20 世紀に時や理由、条件などを表す with 句の使用頻度が急激に増加したことが契機となり with は 20 世紀に前置詞から補文標識へ文法化したと主張した。

#### 参考文献

- Ibaraki, Seishiro (2009) "The Development of the Determiner System in the History of English," *English Linguistics* 26: 1, 67-95.  
 Meltzer, Aya (2010) "Present Participles: Categorical Classification and Derivation," *Lingua* 120, 2211-2239.  
 水野 江依子 (2000) 「副詞の認可と VP Shell 構造」, *JELS* 16, 106-115.  
 Sugiura, Katsuya (2015) *A Synchronic and Diachronic Study of Gerundive and Participial Constructions in English*, Doctoral dissertation, Nagoya University.  
 Thompson, Ellen (2001) "Temporal Dependency and the Syntax of Subjects," *Journal of English* 37, 287-312.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Sugiura, Katsuya "On the Historical Development of *With*-Absolute Constructions," *Linguistics and Philology* 37, pp.35-51, 2018. 査読無し, 名古屋大学英語学談話会.

杉浦克哉 「名詞を前位修飾する現在分詞

の範疇と派生に関する一考察」 *JELS* 34 (日本英語学会第 34 回大会研究発表論文集), pp.172-178, 2017. 査読有り, 日本英語学会発行.

Sugiura, Katsuya “A Head Raising Analysis of Participial Relative Clauses,” *Linguistics and Philology* 36, pp.1-28, 2017. 査読無し, 名古屋大学英語学談話会.

[学会発表](計 3 件)

杉浦克哉 「英語の過去分詞縮約関係節の統語構造について」『第 10 回北海道理論言語学研究会』, 2018 年 3 月 13 日 (於北見工業大学).

杉浦克哉 「縮約関係節の歴史的発達に関する一考察」『第 4 回史的英語学研究会』, 2017 年 8 月 18 日 (於秋田工業高等専門学校).

杉浦克哉 「名詞を前位修飾する現在分詞の範疇と派生に関する一考察」『日本英語学会第 34 回大会』, 2016 年 11 月 13 日 (於金沢大学).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

杉浦克哉 (SUGIURA KATSUYA)  
秋田工業高等専門学校創造システム工学科  
人文科学系・講師

研究者番号 : 40781498

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号 :